

教典と共同体——比較教典研究の可能性について——

宮 嶋 俊 一

一 問題設定

宗教思想研究において教典研究は重要な意味を持つ。事実、キリスト教にせよ、仏教にせよ、教典とされるテキスト（聖書や仏典）に関する個別研究の蓄積は膨大である。また、比較思想の観点からも教典は重要である。なぜなら、そうした教典に記された内容の比較・分析により比較宗教思想研究が成立すると考えられてきたからである。

だが、そもそも教典とは何か、といった議論は決して多くはない。例えば異なる宗教伝統に属する新約聖書と大乘経典を同じ「教典」として比較することがはたして可能なのか、といった原理的な問題に関する検討は少ない。そこで本稿では比較のための理論、原理論的な問題について示唆を与えることを目指したい。

なお、本稿は、宗教学の立場から比較思想研究の方法論的課題を扱うことを目的とする。よって、具体的な思想の比較検討作業は行わない。

二 教典の定義をめぐって

まずは辞書的な定義から始めたい。下田正弘によれば、教典とは「宗教内部の人々が、格別な聖性や権威を帯びたもの」とみなし、自己や世界の意義を解釈し、方向づける根拠とするテキスト、あるいはテキスト群⁽¹⁾であり、「類似の内容を示す経典、聖典、正典などの述語が、宗教の種類や使用される文脈に限定されるのに対して、『教典』はそうした相違にかかわりなく使われる点で、汎用性が高い」。この定義は、きわめて妥当であると言える。すなわち、教典が教典たる所以は宗教、より正確に言えば宗教共同体により何らかの意味において「特別」とさ

れることにある。

ただし、そうであるとして次の問題が生じてくる。近年、宗教概念を西洋近代における学問的創作物とする宗教概念批判^②が盛んとなったが、この批判以降の研究においては諸教典を「宗教」的なテキストとして一括りにする考え方に疑問が呈される可能性もある。後述するが、あるテキストを教典、すなわち「宗教的なテキスト」とみなすためには、宗教が何であるかが定義されねばならず、その「宗教」の定義そのものが西洋近代的な価値観を帯びているとすれば、教典の定義、あるいは教典「観」そのものも西洋近代的なものとならざるをえないということである。

事実、初期の宗教学において、マックス・ミュラーが編集した『東方聖典』の意義は大きい^③。この論集に収録されるということは、それが「宗教」的な教典として認識されたということである。つまり、それらの文献を教典たらしめたのは、西洋近代的「宗教」研究ということになる。

確かに、こうした構築主義的な見方に対しては、批判もあえよう。例えば、異なる歴史的・地理的・社会的・文化的な背景と結びついた各教典が、時代を超えて継承され特定の地域を越えて伝播・拡散したのは、そこに人間にとって普遍と感ぜられる要素が何か含まれていたからだ、といった批判である。啓蒙主義の時代、儒教思想がヨーロッパにおいて高く評価されたという事実を考えてみればわかる通り、その思想が地域

を越えて共有されることは十分にありうることなのである。このような例を考えてみると、教典研究に基づく比較思想研究は、人間の本質探究において重要な意義を持つと言えなくもない。だが、どこまでその普遍性を主張できるかについては詳細な検討が必要であろう。有名な仏教の「四苦八苦」を例にすれば、「死」そのものはすべての生き物に共通の現象であることは確かであるにせよ、死のあり方や死がもたらす苦しみの具体相は時代により、地域により異なっているはずである。何が普遍的で、何が個別具体的であるのか、その見極めが必要となる。

三 教典と聖典

「宗教」概念も同様であり、その個別具体性と普遍性について検討が必要ではあるが、本稿においては「宗教とは何か」という本質的な議論には深く踏み込まず、教典を何らの共同体と結びついたテキストと考えておきたい。このように考える理由は「聖典」概念と「教典」概念を区別するためである。

「宗教」と同様、「聖」概念もきわめてやっかいな概念である^⑤。今日において、「聖」性を自明なものともみなすことは難しい。「聖」概念の定義が困難である以上、「聖」典の定義もまた困難なものとなる。よって、テキストに含まれる聖性の有無を問わないことよって、教典を「聖」典と区別しておきたいのである。言い換えるなら、いかにそのテキストが（一般的な意味で）「宗教的」に見えようと、共同体との結びつきが明確

でなければ「教典」ではなく、逆にそのテキストにより共同体が形成されたり、逆にある共同体がそのテキストを特別視するような、そうしたテキストであれば、それを教典と考えてみただけである⁶⁾。共同体との結びつきにおいて教典が教典となるという意味において、それは一般的な文書とは何らか異なる意味を持つということとなり、その点において教典は規範的な性質を帯びることとなる。さらに、共同体の判断に応じて、「教典」は「正」典(あるいは「偽」典)となりうる。

四 ブラックバーンの宗教テキスト論

教典を共同体との関わりで考えるに際し、参考になると思われるのがブラックバーンの宗教テキスト論である。ブラックバーンは従来の教典研究を還元的テキスト主義(宗教をテキストに還元して理解する)と批判的ポスト還元主義(テキストを過大評価せずむしろ実践の重要性を強調する)の対比によって批判的に捉え返した上で、テキストと共同体との往還運動、すなわちテキストと人間との流動的な関わりに着目して「テキストの共同体」という概念を提示した。以下、このブラックバーンの宗教的テキスト論を紹介しよう。

1 還元的テキスト主義

還元的テキスト主義とは、一言で言えば宗教をテキストによって理解する立場である。初期の比較宗教学者が活動していたのは、歴史文献学(historical philology)や近代プロテスタント

神学、聖書批判などが交差する新領域によって特徴付けられた文化的・知的空間であった。とりわけ、宗教改革の影響により、近代プロテスタントにおいて、聖書が重視されてきたということに注目しなければならない。ここでは宗教伝統が最も確実に完全に現れているのが聖典(sacrum)であると考えられた。言い換えれば、テキストは伝統の時間的な起源であり、啓示や預言のエウレカの瞬間(Urnoment)とされてきたが、このような考え方は、西欧近現代に限らず宗教研究の領域で影響力を持ってきた。

この還元的テキスト主義の例としてブラックバーンが挙げるのは、9・11の同時多発テロ攻撃の後、イスラム教徒の暴力がクルアーンによって正当化されるのか、という問いを中心として米国で行われていた議論である。これはつまり、宗教的な行動はすべて「教典」に還元されるのか、という議論である。アメリカの宗教組織によって開催された宗教討論会では、それぞれが信仰する教典がただ比較されただけであった。こうしたことになるのは、それぞれの教団の考え方はすべて教典によって規定されているという考え方が前提にあるからだと言える。だが、ブラックバーンによれば、権威を持った教典だけではなく、教典理解のための手引き書や応答書のような著作も書かれていて、知識と実践、テキストと儀礼の相克の中で、その限界を超えて共同体に生命力が吹き込まれるようなこともある。

さらにブラックバーンによれば、還元的テキスト主義には、

どのように人がテキストと関わってきたかということ等を等閑に付しているという問題もある。テキストは黙読されるだけではなく、歴史が示す通り、人間とテキストとの関係はそれを黙読しその意味を理解するということに尽きるものではない。そのテキストが個人により、あるいは共同体において、音読されることもある。また、そのテキストが変わることなく、常に同じように扱われてきたわけでもない。人間とテキストとの関わりはスタティックなものではなく、時間、場所、言説^{ディスコース}、相互の関わりによって構築されるものなのだ。このように、宗教的な伝統やその伝統における共同体の分析を書かれた言葉に還元することの問題をブラックバーンは指摘する。

2 批判的ポスト・テキスト主義

テキスト主義においては、それぞれの宗教伝統の聖典が重要とされてきた。とりわけ最も古い文書がそれぞれの信仰の本質をよりよく表すものとして扱われ、より新しい文書は重要ではない、あるいは本来の信仰の実践から離れたものとされてきた。だが、近年のアカデミズムは、還元的テキスト主義からは距離を置く傾向にあり、「宗教」や「伝統」といった概念を脱構築すると共に、聖典への過度な依存を疑問視する傾向が生まれたのであって、こうした傾向をブラックバーンは批判的ポスト・テキスト主義と呼んでいる。

批判的ポスト・テキスト主義は還元主義に対する反応と言える。初期の宗教学は植民地主義政策の中で、西欧諸国家の政策

に奉仕してきたが、この立場はそのことに対して批判的である。とりわけ、特定の述語やカテゴリーを正当化することによって、植民地化されたそれぞれの地方の歴史や文化などが植民地の主要な都市の指示に従属させられてきたことを批判してきた。近代の神学や様々なヨーロッパのアカデミズムのもとで作られた独特な分類法がローカルな信仰に影響を与えてきたのである。

さらに、第二次大戦以降、宗教学と人類学の協働が進んだことで、多数の宗教的な実践が現代人の日常生活で役割を果たしていることが示されてきた。つまり、宗教をテキストへと還元してしまうのではなく、むしろ実践から宗教を理解すべきという傾向が強まったということである。

ただし、ブラックバーンはこうした批判的ポスト・テキスト主義に対しても懐疑的である。というのも、宗教的実践ばかりに注目し、そのみで宗教を説明することは正しくないと考えるからだ。ここで彼女は、テキストと実践との関係こそが問題であるとする。その関係は、宗教的な現象が現れる様々な共同体へ近づく重要な道筋である。そしてそれに基づいて個人や共同体がどのようにテキストを受け入れるか、どのようにテキストを自分のものとするか、という疑問に対しては「テキストの実践」という考え方を示唆している。

3 テキストの共同体

前述の対立を克服するためのヒントとなる第三の道が、「テ

キストの共同体」という考え方である。テキストは共同体によって「教典」化するだけではない。ブラックバーンは、むしろテキストが個人や共同体を形成するものであることを忘れてはいけないと言う⁸⁾。テキストは自分たちのイマジネーションや正しい行為、自分たちと同じ経験を重ねた人々や自分たちとは異なる人々のイメージを特徴付けていく。いくつかの特定のテキストに関して、読む、執筆する、聞く、解釈する、遂行する、などの行為に共通するすべてのものが「テキストの共同体」を構成する。そのような共同体においてテキストに関わる実践は口頭、あるいは文献によって行われる。テキストには印刷物や電子テキストだけでなく、手書きの文書も含まれる。

ブラックバーンは、前述の還元的テキスト主義や批判的ポスト・テキスト主義によるテキスト理解に対して、この「テキストの共同体」という概念が両者の媒介になるかもしれないと述べている。彼女は、歴史とテキストという現象を接触させることによって、人間がテキストを通して互いに流動的に関わっていくことが示され、還元的テキスト主義や批判的ポスト・テキスト主義に対する批判を乗り越えていけるのではないかと言う。さらに、時代が進むにつれて、その共同体の変化に目を向けることによって、「宗教」や「伝統」の定義をめぐる問いにも光を当てられるのではないかと考えている。

五 考察

前述のようなブラックバーンのテキスト論は、近代的宗教観に基づいた教典理解に対する批判であると言えるだろう。すなわち、宗教とは、儀礼や修行、祈りなどの宗教的行為と人間観、世界観、神観念などの思想的な要素が体系化し、それが共同体によって継承されているという近代的宗教モデルに対し、むしろダイナミックに変化しうる共同体との関わりにおいてテキストが「教典」として意味を持ち、機能するという教典観が示されている。ではこのようなブラックバーンのテキスト理解に基づく、比較教典研究にはどのような可能性が開けてくるだろうか。最後にその問題について考えたい。

最初の下田の定義に戻るなら、教典を教典たらしめてきたのは「宗教内部」の人たちであるとされてきたが（そしてそれは間違ではないし、今日においてもその通りであると言えるが）、そうした教団による理解とは別に、教典の文献学的研究（近代聖書学や仏教学の経典研究）は、合理的・批判的なテキスト読解に基づいた研究を重ねてきた。比較教典研究を可能にしたのは、後者のテキスト研究と言ってよいだろう。もちろん、空海の『三教指帰』のような護教論的な目的で書かれたテキストを比較経典研究の嚆矢とすることも不可能ではなからうが、それを研究と呼ぶのは難しい。それぞれの宗教伝統に重なりながらもそれらとやや距離を置いたところで成立した批判的・

文献学的研究の成果は信仰の有無にかかわらず理性に基づき合理的に理解できるものとされ、それゆえにそれらを比較するこの可能性も開かれてきたのではないだろうか。ただし、教団の理解にせよ、批判的・文献学的研究の理解にせよ、いづれもが書かれたテキストを重視してきたことは確かであるし、またそのテキストが教団の形成や存続において重要な役割を果たしてきたと考えることに相違ない。ブラックバーンのテキスト理解は、そのようなテキスト理解に加え、それらが生きた宗教においてどのような役割を果たしてきたか、また果たしていくるかに注目したものとと言えるだろう。その意義を確定していくというよりは、テキストと共同体とのダイナミックな関わりの中で、その意義が更新され続けていくような、そのようなテキスト理解を示したのがブラックバーンの宗教テキスト論である。

このようなブラックバーンの考え方に基づけば、比較経典研究そのものが、(宗教教団ではなく、通宗教的な問題意識を持った研究者によって構成された)ある種の共同体によるテキスト解釈作業と言えなくはない。それは、新しい宗教の形成とまでは言えないまでも、従来の教典理解に対して新たな見方を示す可能性を含むものであった。

だがここで注意しなければならないのはやはり、本質主義的なテキスト理解に陥ってしまうことへの危険性ではなからうか。比較教典研究は、一方で諸宗教教典を分析するための、メ

タレベルにおける共通性を探っていく作業となるであろう。だが、あらゆる教典の根底に存する本質的な「何か」を想定してしまうことは危険である。よって、それぞれの教典の歴史性を十分踏まえ、それぞれの教典が置かれた歴史的・社会的文脈に即した教典理解を無視するような事態は避けねばならない。確かに、(とりわけ文字化された史料を中心として)テキストをいかに理解するかという観点から、どのような教典を読む場合にも共通するような解釈学的方法の検討は可能かもしれないが、あらゆる教典を分析するような普遍的な教典研究の方法構築の方向をさらに追究していくのではなく、むしろ様々な宗教伝統における教典研究の蓄積の相互交流を進めることで、これまでの各教典研究のあり方を見直していくことが、当面の課題となるだろう。

(1) 下田正弘「教典」星野・池上・氣多・島蘭・鶴岡編『宗教学事典』丸善、二〇一〇年、二二頁。なお、下田は「教典なる語が示す内実」は canon と scripture という二概念の機能に帰着する。Canon (正典)の語源となったギリシア語の *kanon* は「規範」や「基準」を意味し、漢語の「典」に語義がほとんどそのまま重なる。一方の *scriptura* (聖典)は「書写行為」「書写されたもの」を意味するラテン語 *scriptura* から派生した語であり、書写されたテキストを含蓄する。キリスト教の伝統において長く新約聖書を特化してさす語として用いられてきたが、現在では宗教の種別にかかわらず「聖なる書物」一般を意味する語として用いる例が確認される」と述べている(同書、同頁)。本来であれば、日本語の「教典」とそれに該当しうる外国語との比較、さらには今日的な意味での教典概念の形成史の探究をせね

ばならないが、紙幅の関係上、省略する。

- (2) 宗教概念批判に関する日本語文献も数多く存在するが、とりあえず島蘭進・鶴岡賀雄編『〈宗教〉再考』ペリカン社、二〇〇三年、および鶴岡・池上・島蘭・関・小田・末木編『岩波講座 宗教〈第1巻〉宗教とはなにか』岩波書店、二〇〇三年を挙げておく。

- (3) 教典研究におけるマックス・ミュラー、および『東方聖典』の意義については、土屋博『教典になった宗教』北海道大学出版会、二〇〇二年を参照。

- (4) 宗教の定義に関しては後述するが、ここではひとまず思想や儀礼がある共同体において共有されている現象としておき、儒教が「宗教」という本質的な問いにはここでは踏み込まない。

- (5) 聖概念については藤原聖子『聖』概念と近代——批判的比較宗教学に向けて』大正大学出版会、二〇〇六年、および、飯田篤司「聖典という問題系——信仰と理性の相克の一断面」市川・鎌田編『聖典と人間』大明堂、一九九八年、二四六—二六五頁を参照。

- (6) こうした見方からすれば、マルクスの『資本論』は共産主義国家における「教典」とみなすことも可能となる。

- (7) Anne Blackburn, "The text and the world," Robert A. Orsi (ed.), *The Cambridge Companion to Religious Studies*, Cambridge University Press, 2011, pp. 151–167.

- (8) 下田掲揚論文、二二頁にも同様の指摘がある。

- (9) 教団による教典理解と研究者による教典理解の違いというのは重要な問題ではあるが、この問題については、紙幅の関係で、本稿で触れることはできない。

(みやじま・しゅんいち、宗教学・死生学、

北海道大学大学院准教授)